

# 清涼炭酸水

夜  
桜

## 第一章

体育館にシューズの音が響き渡る。ボールが床に突き刺さる。女子バレーボール部。チームプレイをしている彼女達も、仲良しなんて保証はどこにもない。悪口を言われるなんてよくあること。私も例外ではない。

「お疲れ様でした。さよーならー。」

体育館にあいさつを済ませると、部室へと向かった。早く帰りたい。お腹もすいたし、何より先輩たちから早く逃れたい。

「ありがとうございますあー。」

毎日これを言うたびに思う。何があるがとうございました、だ。こっちが言ってもらいたいくらいだ。

「ちょっと待って!」

なんなんだ。一体。やっと部活が終わって帰れるというのに。この雰囲気はあれだな。私が察するに注意と言



う名の見せしめだな。ほらほら、今の時間帯はこの部活も帰る時間だからいろんな人が見るんだよね。良い先輩を演じたいのかわからないけど、後輩を道具にするな。

「あのさあ、最近態度おかしくない？」

いや、そっちもな？ 知ってるぞ。お前が最近スランプで上手くプレーできなくて周りに八つ当たりしてるの。それこそおかしんじゃないの??

「調子乗ってんなよ。」

毎日、毎日、先輩が使ったボールをひたすら拾う。その行為のどこに調子に乗れと？ たまに練習が出来ても、とーってもつまらないものだけ。それに、試合形式の時に入れたとしても、先輩の目が痛すぎる。失敗するのが怖くなる。怒鳴られることにうんざりしたころ、ラストの声がかかる。しかし、なかなかこれが終わらない。ラストって言ったのに、何球も何球もやる。下っ端の私はもはや早く終われとしか思っていない。他の子たちだってそうだろう。

「なにその目は?? なんか言いたいことでもあるわけ??」

「ありません。」

反抗したらぐちぐち言うだろうからな!!

「もういいよ、とにかく態度これから気をつけてよね。」

ああ、うざいのがやっと終わったあ。もうこっちは今日も走りまわったから疲れてるって言うのに。しかも最近はまだ夏の初め頃だというのに、気温が異常なくらいに高いんだよね。影を見つめながら一人で帰路に就く。足が重たく、何より一人だから道のりが凄く長く感じる。家に帰ると、すぐ倒れてしまう。勉強なんてやる体力もない。

ピコン。小型の携帯、ライフが鳴った。見てみると、同じバレー部の子からだった。ライフの画面に貼られた文字に目を通す。

「ねえねえ！ 今日のあいっとうざかったね！ また偉そうにしてw」

いつものこと。皆仲良く、なんて出来るわけがない。皆よく言えば、「多種多様で面白い」。悪く言えば……  
「協調性がない」

「皆違う」って大人は言う。でも、その後こう付け足すのだ。

「だから、お互いを認め合って、支え合っていきましょう。」

……全くとっていいくらいに、私は共感できない。

クラスだけでも何十人という。それなのに、「皆と仲良く」なんて出来るわけがない。

そんなの、いくら自分を偽ったって無理に決まってる。

それに、なぜ「グループ化するな」と言うのか分からない。

仲のいい子の一人や二人、出来て当然だと思わない？ 仲いい子が出来たらさ、グループなんて嫌でもできるじゃん。

しようがないと思うんだよね。

画面をタップして、返信を打ち込む。あいつに対しての本当の気持ちであろうことを。

「それな。まじきもかったw。消えてってカンジ??w」

嫌いな人は嫌いだ。一度は仲良くしようとしたものだけけど。

でも、向こうは分かり合う気ないみたいで、嫌になっちゃったの。

中学の部活なんてこんなもん。

もしかしたら高校も。

人間関係なんて、すっごく面倒臭い。

絡まり合った紐ほどに、面倒臭いものなどない。

ピコン。



ああ、返信がきた。

結局昨日はあれから、喋り続けたまま寝てしまった。

「おはよー。」

「あ、おはよ。」

「ねえ、あの後寝ちゃった？ お話中に寝ないでよ。既読無視だからね！」

「ご、ごめん！ 疲れちゃって……。」

取りだした上靴を落とす。

床に叩きつけられた上靴が、はじけた。

それと同時に私の心の中で小さい何かがはじけた。

面倒臭いなあ。私が寝るのなんて自由でしょ。振り回さないでよ。

「ねえ……大丈夫？」

心配そうにのぞき込む顔を見て、ハッ。ああ、駄目だ駄目だ。なんでこんなこと思ったんだ。

「ああ、大丈夫……。」

足で上靴をつっかけて、教室へ向かった。他愛もない話をしていたところに、男子バレー部の友達が出来た。

「なあなあ。今日そっちで中やってから外やる？」

中とか外とかは、要は体育館で先に練習をやるか、どうかということだ。

「外が先だよ。だからランニングすんの。」

私はキレ気味に答えた。ランニングだけさせて、練習はろくにさせてくれないという方針が嫌いなのだ。まあ……こんなキレ気味なことを考えていても、時間は過ぎていくわけで……時間は過ぎていく。うん。そう。時間は過ぎていくの。どんなことを思っても。でも……嫌なことを考えているからか、最近時間の流れが遅い。それに、とても疲れる。体がコンクリートの塊みたいに重い。

授業を受けていても、全く頭に入らない。魂が抜けるようにため息をついた。ふと、目に入ったポーチの絵。女子高生の絵だった。その子は、川に向かって何か叫んでいる。でも、そう見えるだけで、彼女は何一つとして考えていないんだろう。だって、ただの絵だから。でも、どうなんだろう。勝手に描かれ、生み出され、複製され、売られ、さらには捨てられる。でも……生きてないから苦しいなんて思わない?? そう思っていたら横から視線が。その視線はマトリョーシカの付箋から来ていた。その目は冷たくて、私に「ならお前も、魂を抜いて同じ状態にしてやろうか。」と言っているようだった。あ、鐘なっちゃった。今日もまた、授業を無駄にってしまった。まあ、しょうがない。便利な言葉だな。「しょうがない」って。

それから、いつも通りのつまらない授業を受けて、部活やって、家に帰った。

いつものようにへとへとになった私は、とりあえず寝られるようにご飯とお風呂を済ませてからライフをいじった。様々な色に光る画面に顔が照らされる。見たい動画を見つけてタップ。画面が真っ暗になって、読み込みをする。その画面に映る、自分の怖い顔。何かを狙っているような、目。

こんな顔……一体いつから??

読み込みが終わって、動画が再生された。

それでも、脳内にこびりついて離れない。

動画の笑い声が耳をかすめる。私のあの顔。

あんな顔をして毎日学校に行っていたのか。

だから今日の朝心配そうに顔を見られて……。



「どくんっ」

心臓が……破裂しそうだ。

どんと内側から叩いてくる。  
痛い。

思わず丸くなる。泣きたい。

自分の中にいきなり出てきた感情に戸惑いが隠せない。頭の中が戦争状態だ。

感情がケンカしている。

どうしていいのか、まったく分からない。どれが本当の感情だろうか。なんとか心臓は落ち着いてきたものの、頭の中は変わらない。むしろ、悪くなってきている。ぐちゃぐちゃになって、感情が入り混じる。それを黒い幕で覆い隠しているかのように、表には感情を出すことはできない。固まったまま動かない顔を見て、絶望した。なんで……こんなことに。寝るなんて考えは頭に浮かばなくなり、ただひたすらに目をかっぴらいて自分の中の戦争を落ち着かせようとしていた。

気がつけば、朝になっていた。脳内戦争は勢いを保ったままではあったが、外側の自分が疲れ果てていた。半分本能で学校へ行く支度をしていた。洗面所に顔を洗いに行く時、母親とすれ違った。バタバタと洗濯物を手に走っていた母は、私を見ると一瞬動きを止まらせた。そしてすぐに顔を歪ませた。

「あんた……なんかあったの……??」

質問は出来ているが、反対に態度は信じられないというようなものだった。

「別に……」

それからは特に何か会話をするわけでもなく機械的に支度を済ませて学校へ向かった。

ここまでではうっすらと覚えている。その後、はっきりと記憶があるのは廊下で倒れる直前だ。あれは、確か体育館に向かって……。めまいがしたような気がした瞬間、力が抜けてしまって頭を強く打った。意識が遠のく時に何か聞こえたような……。

「……に……。ね……。」

## 第二章

起き上がると、私は制服姿のまま真っ白な絨毯のようなものに寝っ転がっていた。

胸の不快感は消えて、清々しい気分さえ感じる。と。

突然現れた影が私の顔に落ちる。

「ねえ！」

斜め下に視線を送るとそこには、白いワンピースを着た女の子が私の足にまたがって仁王立ちをしていた。この子……。どっかで見たような気がする。

「ねえってば！ 早く起きて！」

そう言いながら彼女は私の腕を引っ張って無理矢理起こしてきた。お互い向きあうような形になると、顔を覗き込んできた。私も視線が気になって相手の顔を見る。やっぱりどっかで……。

「やっと来てくれた！ 待ってたんだよ。」

喜びの溢れる彼女の顔に、私のはてなの溢れた顔を向けると、まさかという目で見つめてきた。

「もしかして。私のこと、わかんない？」

彼女に忘れたと言ったら、とっても傷つくだろう。きっと、私にとって彼女は忘れちゃいけない存在だった



んだ。でも……知ったふりをしたって、得られるはずの情報を得られなくなるだけだ。少し時間をおいてゆっくり頷いた。

「そっかあ、やっぱりか。他の子も忘れられてるんだよね。特に、君くらいの年になると複雑みたいで。」

「それで……君は？ 私の何なの？」

「私はね、君の本音。」

……は??？ 本音？

本音って、あの本音でしょ。

あの。

自分がホントに思ってること。

形なんてないはずだよ。

じゃあこの子は一体……。

「いろいろ考えてるみたいだけどさあ、時間もないから話したいな。」

「あ、うん。」

反射で思わず答えたものの、脳内ではまた整理がつかなくなっていた。

「私はね、ちゃんと理由があって君をここに呼び出したんだよ。」

彼女が私の目をまっすぐに見つめる。すぐく大事な話なんだろう。

「君は……どうしてそんなにも、私を隠すの。」

感情的ではなく、静かな声だった。でも、その言葉は私の心に刺さった。

「なんでって……み、皆に嫌われるんだからしょうがないじゃんか。」

「みんなってだあれ？」

「皆って言うのは、クラスメイトとか部活仲間とか。」



彼女は立ち上がって私に背中を向けた。

「皆に好かれるために、私を隠したんだね。」

スカートの裾をめいっばい握っていた。私が答えられずにいると、ハッキリ息を吸ってもう一度声をかけてきた。

「建前はね、必要なんだよ。特に人間関係ではね。」

「そうだよ！ 必要なんだよ！」

自分を正当化したいという思いが働いたんだと思う。

一気に畳み掛けるようにして言った。

でも、彼女はそれをさえぎった。

「でもね、自分をあまりに隠しすぎても。」

「顔だけこっちに向けて目を合わせた。」

目の奥まで、視線が届いて脳内を見透かされているんじゃない。そう思う。

「自分がなくなるよ。」

焦りか。

不安か。

分らない。体の奥から何か熱いモノが湧いてくる。

耐えられなくなって私は立ち上がった。

「自分を見失うなんてバカなことはいらない。」

「本当に？」

返しが早い。早すぎて動揺が顔に出てしまいそうだ。

「本当に、君は自分を見失わないと言い切れるのね？」



「い、言い切れるよ。」

無理矢理答えていたかもしれない。

でも、見失うなんてことはしないと思っているのは本当だ。

どんだけ建前を使っている、自分をちゃんと持っていればいい。

「じゃあ答えられるよね？」

お腹に力が入る。耳に神経が集中する。一字一句漏らさないように、だけど聞きたくないことなら無視してしまいたいと思いつながら。口が動く。ゆっくりと、開かれる。まるでスローモーションのようだ。

「部活の子の悪口をライフで言っていた時、どんな気持ちだった？」

何だそんな問題かと思うと同時に、どう答えるか頭をフル回転させて考える。

早く。早く。答えを出せ。

眼球に答えが打ち込まれていく。

それを読み上げた。

「自業自得だって、言われていたってしょうがないって思ってたよ。フツーに。」

フツー。普通。ふつう。ふつう？ 平凡？ 日常的に使われる「ふつう」。でも何が普通なの？ 分からない。

きっと、彼女も私も、誰もかれもが答えられない質問。問題。

何が普通？？

そんな問題が生まれる私の言葉に、彼女は体をピクンと反応させた。

「……本当はそんなんじゃないのに。君はまだ。」

下を向いて体をこちらに向けてきた。

「何でまだ嘘をつくの。」

彼女は「フツ」には触れなかった。けれど、そう言った彼女から、水が流れていた。どくんっ。体が熱い。

「熱い？ それってね、君が嘘をついたからなんだよ。」

「うるさい！ 嘘なんてついてるわけがないだろ。」

「そうやって自分を洗脳しているだけ。」

彼女の声は純粹な言葉で出来ている。

それは私の、こころの奥の、

「ナニカ」を切りつける。

どろりと黒いモノが流れてくる。

流れてきたそれを知った私は

「ああ。」

と声を漏らした。

溢れてきたのは、言葉だった。

今まで散々使ってきた言葉。

うざい。きもい。消えろ……。

なんて汚らわしい言葉なんだろう。

ただ、ただただ……茫然。

「君を救えるのは、君自身。でもね、君って言っても二人いるんだよ。」

「二人？ なにそれ……そんなの。」

「中二病みたい？ そうだよね。君と同じ立場だったら私もそう思うだろうね。」

彼女は本当に私の本音なのだろう。



だってこんなにも、私の心に刺さる。  
もう苦しい。

「お願い。もうやめて。」

私はその場にしゃがみこんだ。

すると、彼女もしゃがんできた。

私は分かっているんだろう。

私がどんなに言葉をつないだって、

それはツギハギだらけの言葉でしかないだろう。

それが分かってもなお、口から言葉を溢れさせる私って何なんだろう。

彼女が言うように、自分を洗脳しているのだろうか。

分からない。

彼女は私を気にせずに話を続けている。

「黙ってよ。黙れ！」

叫ぶ。

喉が潰れる。

声を出しているのかも分からなくなっていく。

酸素が尽きて、私は口を閉じた。

次に口を開いた時に出てきた音は、

泣き声だった。

気付けば私は、背中を丸めていた。

背中をさすっているのは言うまでもなく、彼女だろう。

泣くのをやめた。

無意味に思えたから。

少し顔をあげると、すぐそこに彼女がいた。涼しげな彼女は純粹で綺麗な目をしている。その目で見つめられると、思わずひるんでしまう。

彼女が本当に伝えたいのは、

「本当の自分をさらけ出せ」

ということなんだろうか。

「違うよ。」

思考を読みとられることには、だいぶ慣れてきた。慣れるっていうのもおかしい気がするけど。

「あのね、自分をさらけ出せって言うわけでもないんだ。っていうのも、さっき言ったように建前も必要だから。建前がなかったら、傷つく人もいっぱいいると思うんだ。私はただね、隠しすぎるなって言いたい。それだけじゃないけど。」

隠しすぎるってどんなだろう。建前って言うのはもちろん分かっている。私だって、建前くらいあるさ。この年にもなると、それ無しじゃやっていくのは難しいだろう。私のクラスには、建前のないやつもいたが、ソイツはクラスから「空気読めない奴」と、レッテルを貼られていた。レッテルを貼られるのだってしょうがないだろう。皆それぞれの価値観だってある。レッテルを貼らない奴は、「なにも考えていない」か、ただ単に「他人に興味がない」のだろう。私だってレッテルを貼られているはずだ。でも、きっとその粘着力は弱いだろう。

「隠しすぎて言うのはね、君は私を押し殺しすぎてこと。体がそのストレスに耐えられなくなってきているんだよ。ストレスは、体を壊すことが出来る。それを忘れないで。」

言葉を言い換えられても全く思い当たる節がない。



「分からないだろうね。向こうに戻ったら、ちょっと意識してみて。」  
私が頷くと、それを見た彼女はふわりと笑った。

「それと……。」

その瞬間、ドボンッ。突然足元が柔らかくなり、沈む。思わず目を瞑る。終わらない柔らかい感触。ゆっくりと目を開ける。目の前が真っ黒だ。いや、これは目を開けているのか？ 真っ暗すぎて分からない。でも、段々と右上から光が差し始めて、周りが泡だらけだと気付いた。ここはきっと、プールの中だ。でもなんで、プールになんか。水の中になると、自分が空色に染まったみたいだ。なんて、くだらないことを考えてしまう。ふと。横に人が来たから顔を向けた。もちろん彼女だった。

「ここはね、君の心の中だよ。下を見て。」

言われるがままに私は足元に視線を運んだ。

足の先は、深海のように真っ黒だった。

「下は君の、まあ黒い部分。最近働いているのは、そっちの方が多いかな。」

なんとなくわかる気がする。

最近は何の人も軽蔑したりしていたから。

いつから私はこんな風になってしまったんだろう。

昔はもっと、軽蔑とかはしてなくて、だから汚らわしい言葉を使うこともなかった。

どうして……。

「黒い部分があまりに多くなると、大変なことになるんだ。」

その声は、深く、重かった。思わず怖くなって、私は彼女の目を見た。

「大変なことって……？」

「そうだな……感情が暗いモノばかりになっちゃって、自殺とか。犯罪したりとか。君の人生にとって大きな

障害になるようなことだよ。」

その言葉に私は絶句した。

まさか。

ただ、ただ黒いモノが増えるだけで。

嫌だ。そんな人生なんか歩みたくない。

今まで溜めた黒を零にして、始めからやり直してしまいたい。

「過去に戻ることは当然無理だよ。じゃあなんで私は君をここに呼んだか。それはね。」

そこまで言うのと、彼女は私の頬を手で優しく包んだ。その手はとても温かく、心地が良かった。

「もっと、この綺麗な部分を見て欲しかったからだ。君くらいの年になると、ほとんどの人が目を逸らしてし

まう。こんなに綺麗なのに。」

とっても悔しそうで、苦しそうな声で彼女は私に言った。

なんで、私はこの気持ちが無いものにしてしまったんだろう。

こんなにも、清涼飲料水のような、あわく、さらさらとした気持ちさえ持っているのに。

それなのに。

「しょうがないと言えば、しょうがないことなんだよ。」

彼女は苦笑いを作った。

「だってさ、皆人間関係忙しいんだよ。」

そう言われて、私は初めて自分の人間関係を振り返った。確かに。人間関係は常に変わってくる。それはまるで、止まることのない時間。一瞬たりとも気が抜けない。仲が良さそうに見えてそうじゃなかったり、喧嘩がいきなり勃発したり。予測なんて出来ない。する暇がない。私たちがめまぐるしく動く人間関係に対して出来ることと言えば、その時に適切な「人」になることだ。でも、気付くべきだ。私はそう思った。



「ねえ、本音って誰にでもいるの？」

彼女は私が質問したことに驚いているようだったが、興味を持ったことを察すると嬉しそうに笑って答えた。

「うん。いるよ。でもね、本音同士が関わるのって、君らが本音で話してくれた時だけなんだ。」

「そっか。じゃあもしも私が一切本音を話さなかったら。」

「私はずっと一人ぼっち。」

そうか。私は私だけで生きてるんじゃないのか。私は。私たちは、本音のこっちでの生活を背負っているんだ。

「君みたいに、実際にこうやって伝えることって他の子も出来るのかな？」

「すごい強くて君たちのことを思えば、こうやって話せる。でも、意味がないってしない人も多いの。」

「意味がない？」

「そう。君は、まあ信じてくれてると思うけど、多くの人は夢だと言って無理矢理帰ったり好き放題をするからね。」

その言葉に私は納得した。今はいろいろな機械が発展していて、「こんなことあり得ないだろう」というものも科学で証明されている。それらは常識として世の中に浸透している。

今になって思う

「なんて生きづらい現代なんだ。」  
と。

「君と話せてよかった。向こうでまた頑張ってる。」

何を突然お別れみたいな……。

そう思った時、脳裏に言葉が甦った。



「色々考えてるみたいだけども、時間もないから話したいな。」

……時間。

「ねえ、もしかして。」

「うん。時間がもうない。ごめんね。呼んで話すのって結構体力使うんだけどあんまり体力がないから。」  
彼女は申し訳なさそうに下を向いた。

「私さ、向こうでちゃんとやれるかな。」

「何言ってるの？ できるに決まって……。」

「本当に？ ホントにできると思う？ だって私またあんたを隠しすぎちゃったら！」

彼女は何年間も、隠されているのを我慢してきたんだろう。でも、この夢みたいな空間が無くなって、元の場所に私が戻れば、それと一緒に自分の記憶も剥がれ落ちてしまうんじゃないか。そうだったら、また彼女はここで一人ぼっち……。

「大丈夫！」

彼女はとびっきりの笑顔を私に向けた。

「絶対覚えてるから。私の力でそうするから大丈夫だよ！ もう時間。じゃあね！」

そう彼女が言い放つと、突然足元に大きな穴が開いた。

落ちていく。

とっさに叫んだ。

「本音と話せてよかった！ 私、頑張るから。」

そう言った私の声が聞こえたかは分からないけれど、笑っている顔は見えた。

本音の顔が見えなくなると、気を失った。



### 第三章

「あーあ……行っちゃった。」

言葉とは裏腹に、私は笑っていた。

また一人になったけど、向こうに戻って本音を話してくれれば。と、ぼんやり思った。

「本音」なのに、最後嘘ついちゃった。

ごめんね。

### 第四章

まぶしい光を受けて私は起きた。ここはどこだろう。左右と前をクリーム色のカーテンで塞がれていることから、すぐに保健室だと分かった。ベットの上で足に力が入ることを確認して、カーテンの反対側にいるはずの先生の元へ向かった。やっぱり先生はそこにいた。机で事務作業をしていたようだ。

「先生。」

後ろから声をかけると、先生は肩をピクンと動かした。その姿は、あの子に似ていて、思わずクスリと笑ってしまった。私を見た先生は勢いよく立ちあがり、私の肩を掴んだ。

「大丈夫！？ けがはない？」

私のぼかんとした顔を見ると、先生は顔を真っ青にさせた。

「え……もしかして記憶喪失！？ どうしましょう！ やっぱり病院に行くべきじゃ。」

何だか慌てているみたいだ。

落ち着きがなく、ずっとうろろしている。

でも、私は記憶喪失なんてしていない。

「待ってください！ 大丈夫ですよ。私あれですよ。学年集会に行く途中に……。」

そう言った瞬間、先生が私の方に顔を向けた。その速さのせいで私は先生のポニーテールにビンタを食らった。「そうよ。あなたいきなり倒れて！ 長い時間眠っていたのよ。ただの疲れで倒れたみたいだけど、倒れた時に怪我をしていないか心配で。でも、何もなくて良かったわ。しっかり体調管理して気をつけなさいよ。」

「分かりました。先生。」

時計を見るとすでに5時30分だった。

部活は今日あるはずだが……。

「部活なら今日はもう休みなさい。顧問の先生にも言っているから。それと、荷物は友達がまとめて持ってきてくれたわよ。」

「ありがとうございます。」

私は荷物を持つと直ぐに保健室を出た。廊下がオレンジ色に染まっている。そこに伸びる一本の長い影。まっすぐ背筋が伸びていて、自信を持って歩いているように見える。その影を自分で見て笑った。すごいカッコいいじゃんか。とからかうように。靴をはいて外に出た私は、いつもより明るい顔立ちをしていたと思う。それくらい、なぜか幸せに感じたんだ。まっすぐに家に帰ろうとしたが、川の横を通った時、思わず立ち止まった。綺麗だ。これもまた、忘れてしまったもの1つだろうか。太陽の光が反射してキラキラしている。私は階段を探して下りて行った。靴下を脱いで靴に詰め込んで、川に入った。まだ入るには早すぎる時期だが、本音には逆らえない。しばらく水の柔らかさを味わった後、足をめいっばい下げてそして振り上げた。それと同時に。周りの空気が動き、水がはじけ散った。空中に投げだされた水滴は、パチンと音を立てて割れた。まるで炭酸の泡のように。



全ては一瞬の出来事。

次に呼吸をした時、

彼女の中にあつた黒いものは

全て水に流れ

その代わり取り込まれたのは

まっさらな

清涼飲料のような水だった。